

# 長野県社会福祉士会 NEWS

第213号  
2026/3/1



発行▶公益社団法人長野県社会福祉士会  
会長 吉澤利政  
事務局▶〒380-0836長野市南県町685-2  
長野県食糧会館6F  
編集▶広報編集委員会  
発行部数▶2,450部

TEL▶026-266-0294 FAX▶026-266-0339 E-mail▶info@nacsww.jp HP▶https://nacsww.jp/

医療的ケア児・者支援シンポジウム in 南信

..... 1~3

災害福祉支援セミナー ..... 4~5

上伊那ブロック学習会 ..... 5

東信地区 第3回学習会 ..... 5

contents

特集 私たちの地域における

災害時の課題と必要な支援とは ..... 6~7

リレーエッセイ ..... 8

福祉士について「ぐるっと」考える ..... 8

編集後記 ..... 8

## 医療的ケア児・者支援シンポジウム in 南信

### 誰もが住み慣れた街でwell-beingを実現する為に ～飯田市における地域リハビリテーションの取り組みから～

2025年12月7日(日)に医療的ケア児・者支援シンポジウムin南信が開催され、対面およびオンライン形式で83人が参加しました。飯田市健康福祉部福祉課障がい福祉係の地域リハビリ担当で理学療法士の平沢康弘氏を講師に迎え、医療的ケア児・者への地域リハビリテーションの現状、その意義と展望、支援におけるwell-beingの実現について理解を深めました。

#### 基調講演

### 医療的ケア児・者と地域リハビリテーション

講師：平沢康弘氏（理学療法士・飯田市地域リハビリテーション担当）



地域リハビリテーション（以下「地域リハビリ」という。）とは、障がいのある子供や成人・高齢者とその家族が、住み慣れたところで、一生安全に、その人らしくいきいきとした生活ができるよう、保健・医療・福祉・介護および地域住民を含め生活にかかわるあらゆる人々や機関・組織がリハビリテーションの立場から協力し合って行う活動です。

飯田市福祉課障がい福祉係では地域リハビリを「障がいのある方に関わる『支援者を支援』すること」と捉え、家族への介護指導や相談、支援スタッフへのアドバイスや勉強会、福祉用具や住宅改修に関する相談、福祉用具のリユース品の管理、障がいのある方のスポーツ支援、個別避難計画と避難訓練、地域リハビリ研修会等のさまざまな支援者支援の活動を行っています。

昨年、飯田市では、「知ってほしい、医療的ケア児～地域の中でみんな一緒に～」と題して広報の特集企画を組みました。この地域にも医療的ケア児・者がいること知ってほしい、災害時は地域の避難所に身を寄せる可能性があることを知ってほしい、医療的ケア児が抱える課題等を知ってほしいとの思いから、広報番組を制作して放送しました。

#### ○広報番組の内容

飯田市在住の医療的ケア児について、自宅や養護学校での生活の様子、複学籍（養護学校と小学校両方に通う）の推進について、障がい者を対象とした水泳教室、地震災害を想定した避難訓練等の取り組みが紹介されています。※シンポジウム参加者で視聴しました。

ここで紹介された取り組みは全て地域リハビリと言えますが、特に紹介したい取り組みとして、災害関連の取り組みがあります。

飯田市では、飯田防災アプリ「結防」(ゆいぼう)を使用して個別避難計画を作成していますが、医療的ケア児・者については、「災害対応マニュアル」を個別に追加作成してデータとして取り込んでいます。「災害対応マニュアル」を作成する際は、地域リハビリ担当者が同行しています。また、個別避難計画の作成だけでなく、実際に医療的ケア児が参加しての避難訓練も計画・実施しました。本人・家族の参加意思の確認から始まり、自治会関係者、民生児童委員、防災担当者、医療・障害サービス担当者等にも参加を依頼し、打ち合わせの会議を経て、実際に避難訓練を実施してみました。この取り組みには、本人・家族の積極性、地域住民やサービス関係者の協力が欠かせません。専門職と一緒に参加することで、「私は何もできない…」という地域の参加者の不安を和らげる工夫も必要です。準備万端で災害が起こることはあり得ません。ある程度の計画をしたら、「やってみる！」というノリと勢いがとても大切です。

講師：亀井智泉氏（長野県医療的ケア児等支援センター副センター長）

あちこちで聞かれるのは、「リハビリテーションは福祉か、医療か」ということ〔会場内で調査→「わからない」が最も多い〕。

「共生社会」は私たちが目指す社会の形。それを実現するための仕組みが「地域包括ケアシステム」。そのシステムが具体的に動くために地域の人々がどう動くかというのが「地域リハビリテーション」なのではないか、というふうに整理をしてみた。目標はやはり「住み慣れた場所でその人らしく生き生きと安全に暮らし続けることができる」ということ。

医療的ケア児は何の支えもなく退院をしてくると、本当に社会的課題だらけ。そこで必要となってくるのが「社会的処方」で、リハビリテーション専門職が非常にありがたい存在である。

地域リハビリテーションの専門職は、体のこと、医

療のことだけでなく、その地域ならではの「日常知」に長（た）けた地域生活のプロでもある。

医療と命と生活、成長、人生を支えていくためには、専門性に立脚して戦略的に地域エンパワメントをする「リンクワーカー」が欠かせない。よく地域を観察（Observe）して状況を判断（Orient）し、みんな話合せて決定（Decide）して、実際に行動を起こす（Act）。そしてその成果を観察（Observe）する…という「OODA（ウーダ）ループ」により地域資源を編み出していく。

住民が、医療的ケア児だけでなく家族や支援者が自分たちの専門性を活かして「自分は地域にこんな貢献ができる」といった形でつながりあってできる共生社会への地域エンパワメントが進めばありがたいと思っている。

● シンポジウム「医療的ケア児・者の支援におけるwell-beingとは」 ●

シンポジスト：長沼邦明氏（飯田病院附属仲ノ町診療所医師）

飯田下伊那で初めての医療型短期入所施設が認可された（2023年）。これは（飯田医師会に）相当の熱量で関わっていただいたと思っている。長期入所施設については20床以上という基準の見直しを求め活動している。

長年、飯田下伊那で重症心身障がい児・者（重心）、医療的ケア児・者（医ケア）の医療に関わってきた小児科医としての反省とお願いは次のとおり。①現在休止状態になっているフォーラムを再興してほしい。②重心、医ケアとして支援を必要とする可能性のある子どもがいたときに、早い段階から地域が面的に入る支援体制を整えてほしい。③病院以外の地域支援体制を整えていく必要がある。地域基幹病院と県立こども病院だけで完結させないでほしい。④データベースをきちんとしてほしい。⑤重心、医ケアにも高齢分野におけるケアマネジャーと同じようなことをしてくれる人がついてくれるような仕組みを。

シンポジスト：丸山晃治氏（飯田市医療的ケア児等コーディネーター）

主な業務は①圏域の医療的ケア児等の実態把握・台帳の整備（全数把握）、②退院後の在宅療養移行に向けた地域の支援チーム作り、③就園就学時の関係機関のつなぎと体制整備、④障がい福祉サービス利用に向けた訪問支援相談、⑤個別支援計画…など。家族支援については、子どもの成長と家族の変化に合わせたチームマネジメント、医療・保健・教育・福祉の関係者での情報共有などに努めている。支援者の支援として医療的ケア児の通う保育所・小中学校への巡回訪問、看護師の情報収集会等を行っている。圏域で解決できないことについては県医療的ケア児等支援センターに助言を求めたり、他の圏域につないだりしている。

いろいろな新しい情報を圏域の方々に伝えていくという役割がある。この圏域にない社会資源についても情報を出し、必要なものについては作っていくという役割もあるのではと思っている。

シンポジスト：松本香織氏（飯田市医療的ケア児等コーディネーター）

乳幼児期から学童期の子どもを中心にサポートしている。（保護者にとって）医療的ケアについては初めてのことが多く戸惑う方もたくさんいる。乳幼児期の医療的ケア児は病院や訪問看護ステーション等の医療の支援が不可欠。飯伊圏域では保健師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士などのリハビリテーション専門職、「子ども発達センターひまわり」のコーディネーターや先生方とともに支援チームを作ってサポートしている。就園・就学にあたり、医療的ケア児等コーディネーターは学校・保育園の体制づくりのお手伝いをしている。医療的ケアがあるというだけでは養護学校判定にはならない。飯伊圏域では医ケア児が地域の保育園や小学校へ通っている事例がまだまだ少数。各市町村には医療的ケアの基礎となるガイドラインを作っていただくことをお勧めしている。

## シンポジスト：林 愛 氏（飯田養護学校教諭）

どんなに障がいの程度が重度でも本人が主体的、意欲的に学べるような学習を提供するために、飯田養護学校はかなり先進的な学びをしていると思う。重度心身障がい児向けの授業は教師の一方通行になりがち。見た目の良さでなく、本当にこの子たちが何をとらえているかを大事にしている。

保護者には「在学中の生活を充実させることも大事だが、卒業後の準備も小さいうちから進めていこう」と話している。卒業後の生活を見据えて入所、ショートステイを利用している子もいる。保護者は学校生活と並行して将来を見据えた生活づくりを進めている。私たちはその手助けをしている。



在学中に、その子を中心としたつながりを作ることが大事だと思う。その子のことも大事だが家族・きょうだい児のことも大事。その一人ひとりがよりよく生きていくためのネットワークと土台作りをしているのが学校だと思っている。

## シンポジスト：松 澤 陽 子 氏（飯伊圏域障がい者総合支援センターほっとすまいる所長）

現在、飯伊圏域では18歳までの方々を「飯田市子ども発達センターひまわり」で、18歳以上を「ほっとすまいる」で対応している。「ほっとすまいる」は就業・生活支援センターも併設している。

ある事業所で食事、入浴全般の支援を受けている方が、できることを発揮して商品を作る。そして地域の中に（その商品を）使う方がいる。ある利用者の母親が「まさかうちの子がお金を持って帰ってくるとは思わなかった」と話していた。社会参加をする、そこにその方がいる意味がある。事業所も大変な中でやっていただいている。いろんな作品ができて、その方の収入につながっている。

一番大切にしたいのは「本人がどういうふうになりたいか」ということ。それはどんなふうにも実現できていくのかということを経験しながら地域の相談支援事業所と協働させていただいている。

## コーディネーター：武 井 弘 江 氏（放課後デイサービスしろくま管理者）

意思決定支援、面的支援は、必ず家族・本人が中心にいて、周りで支援をつなげていくというのはやはり理想とするところなのだと思う。ここ数日、ウェルビーイングについて考える機会をいただいた。（地域には医療的ケア児等の）「受け皿」が本当にない。社会福祉士会の皆さんには「受け皿」をぜひ考えていただきたい。

ほかにコメンテーター・亀井智泉氏（前掲）、シンポジスト・平沢康弘氏（前掲）

## ● 受講者アンケートより ●

非常に満足している……………24 (71%)	やや満足している…………… 7 (20%)
どちらともいえない…………… 2 ( 6%)	あまり満足していない… 0 ( 0%)
まったく満足していない… 0 ( 0%)	無回答…………… 1 ( 3%)

オンライン開催について「よかった」「参加できてありがたかった」という声が多く寄せられた。

### 【自由記述】

#### 《基調講演について》

- 地域リハビリや支援者を支援することの意義を理解することから、今後私たちが担う役割について考えていきたい
- 専門職や地域住民が地域リハビリテーションにどのように関わっているのか、具体的な例や関わり方をもう少し詳しく知りたかった

#### 《報告について》

- 飯田市での取り組みが長野県全域でも広がっていくといいなと感じた
- 「リンクワーカー」という概念について新たな学びがあった

#### 《シンポジウムについて》

- それぞれの立場からの話が聞けてよかった
- せっかくのメンバーなのだから討論（意見交換）を聞いたかった

#### 《医療的ケア児・者の支援について》

- 圏域内の今までの取組や現在の状況を知ることで、（自分が所属する）事業所の役割がわかった気がする
- 正確なデータベースの作成には、回答の丁寧な検証、調査機関の一元化が必要だと思う
- 多様な立場の人が参加し、ともに考えていくことが必要だが、当事者本人の思いを一番大切にしていきたい

## 能登半島地震から2年をふりかえる ～災害時に展開するソーシャルワークの役割について～

災害福祉支援委員会は1月31日、今年度の災害福祉支援セミナーをオンライン開催し、約30人が参加した。「能登半島地震から2年をふりかえる～災害時に展開するソーシャルワークの役割について～」をテーマに、社会福祉法人佛子園の村岡裕専務理事（本会会員）の基調講演、災害福祉支援委員会からの報告などを行った。

### 基 調 講 演

#### 「能登半島地震 発災後から現在までの取り組み」

講 師：村 岡 裕 氏（社会福祉法人佛子園 専務理事）

社会福祉法人佛子園は、公益社団法人青年海外協力協会（JOCA）と協力して2024年1月の発災当初から支援に取り組んでいる。

地震の翌々日から、金沢市内にある法人施設を人と物資のロジスティクス拠点、輪島市と能登町の施設をハブ拠点として、物資を送り届けるということをや約4か月行った。毎日、現場から情報を得て、佛子園の事業所だけでなく、近隣の避難所、福祉施設へ必要なものを送り届けた。

社会福祉法人は事業所だけでなく地域の方、利用者の方の生活をいかに守るかが重要。ハブ拠点を設置して地域への支援をしていくことを事業継続計画（BCP）の見直しで加えていこうと思っている。

さらに日常と非常時の垣根をなくす「フェイスフリー」の概念を加える。集会所を基地（ベース）のような存在とすることに取り組んだのが「コミセンBASE」。災害関連死は避難所にいる時より仮設団地に移ってからのほうがリスクが高くなる。集会所に風呂と食堂を設け、会議などがなくても人に来てもらって災害関連死の防止につなげようとした。

JOCAと佛子園による仮設団地への訪問は2024年2月16日から2025年12月31日までで66,660件（うち面会29,000件）。2025年4月以降輪島市内に3か所開設したコミセンBASEは、これまでに延べ約93,000人が利用。仮設訪問で会えない住民が入浴施設を利用している事例もある。石川県全体の災害関連死が直接死の約2倍であるのに対し、輪島市は1.28倍。コミセンBASEは災害関連死の抑止に何らかの貢献ができたのではないかと考えている。

（コミセンBASEは）今後起こり得るであろう災害に活用できるモデルにしたい。新設は（コスト面で）現実的に不可能。既存施設をどう活用するか。入浴設備や食堂は、デイサービスや老人福祉センターにはある。災害時には既存の施設を使える状態にするとすぐに活用できる。その近くに仮設団地が設置できれば、取組を速やかに行うことができるのではないかと。

人と人とのつながり、おいしい食べ物、ちょっとおしゃれな感じ、という「仕掛け」を作って人が来る場所に。それを含めたフェイスフリーの福祉サービス拠点を制度化できないか。

### 災害福祉支援委員会報告

#### 「能登半島地震を踏まえ これからの災害ソーシャルワークの展開」

報告者：山 崎 博 之（災害福祉支援委員会 副委員長）

災害福祉支援委員会は2017年度にプロジェクトとしてスタート。熊本地震の福祉支援の検証と地域の福祉支援ネットワーク構築の検討を行い、2019年1月に地域の福祉団体により長野県災福ネットが構築され、長野県DWATが発足。同年10月に発生した台風第19号に際して、DWATや災害ボランティアセンターが動いたり、地域ささえあいセンターが展開されたりした。2020年度からは台風第19号での支援を検証し、地域に視点を向けた災害コミュニティソーシャルワークを協議してきた。

能登半島地震では47都道府県すべてがDWAT派遣されたが、長野県DWATは派遣者数が全国で一番多かった。一般避難所である中学校の体育館でソーシャルワーク機能を活かしたアセスメントをしたり、地区の体育館に福祉避難所を開設し2か月半にわたり運営をした。被災者の生活フェーズの移行と災害福祉支援の対応では、この間さまざまな被災者再建制度があるが、申請ができないなど配慮が必要な方々に対してアプローチしていくということも行ってきた。

2025年は災害救助法と災害対策基本法の改正により、災害救助の種類に初めて福祉が明記された。また災害福祉支援のガイドラインの改正により、DWATの支援がこれまで「場所」（避難所）の支援であったものから、「人」（避難者）の支援へ考え方が転換された。

法律やガイドラインが整備されたということで、災害時における福祉支援の期待と役割はますます高まってきた。今後もこういった新しい情報を入れながら、災害時のソーシャルワーク機能だけでなく、平時の社会福祉士の業務や活動としても反映していけるのではないかと考えている。

## まとめのセッション

村岡 裕 氏 (前掲)

JOCAと佛子園で仮設住宅訪問業務を受け、50か所を超える団地を計画的に訪問している。1日10人前後のスタッフがさまざまな話を聞いて回っている。住宅再建に関わる家族のすれ違いや葛藤の問題の相談が多い。ここにソーシャルワーカーに来てほしい。それをこれからソーシャルワーカーになろうという人たちも学んでいくことが、今後の災害ソーシャルワークを考えるうえで大事なのではないかと強く思っている。

北原 由紀

(災害福祉支援委員会委員長)

やはり「地域」が肝になっていくと思う。

災害支援では一般避難所や福祉避難所の立ち上げに関わり「受け入れる支援」を行うフェーズと、避難所から「送り出す支援」のフェーズがある。暮らす場所が変化していくときに、他の組織との連携を図り、フェーズごとに必要となる「意思決定」に寄り添うソーシャルワーカーの役割は大切だと思う。普段やっていないことはできない。それを踏まえ、今日のセミナーの内容を日常の業務に生かしてほしい。

小野 貴規

(災害福祉支援委員会委員)

災害が起きた時の課題は、多岐にわたる。社会福祉士である以上、福祉サービスだけでなく、生活全般の課題をしっかりと把握して、その人や地域を見つめるという視点が大事になってくる。普段の業務実践の積み重ねのほか、社会福祉士会の学習会などで他分野の動向もしっかりキャッチするのが大切。一人ひとりの技量、知識を普段から高めることが必要。

### 上伊那ブロック学習会

#### 「食を基盤にしたセーフティネットの構築」～専門職に期待すること～

小林 明 美 (南信教育事務所スクールソーシャルワーカー)

上伊那ブロック学習会が12月19日にオンラインにて開催され、20名の参加がありました。「認定特定非営利法人フードバンク信州」事務局長の美谷島越子さん(本会会員)を講師に「食を基盤にしたセーフティネットの構築～専門職に期待すること～」としてお話をいただきました。

フードバンク信州は①食品ロスの削減と資源の循環②食を基盤とした地域セーフティネットワークを目標に、企業や家庭からの食品ロスを食の循環システムに乗せ、持続可能な社会、支え合う社会づくりを目指しています。子ども応援プロジェクトや、長野県内各地域の社協や団体等が行った休眠預金活用事業を活用した食料支援の紹介もありました。

先生から「貧困」とは単にお金がないだけではない「つながりの貧困」があり、食を通して安心を届ける、専門職にはそれを一歩として、複合的に生活のしづらさを抱えている方に寄り添いながら課題の整理を行うことを期待する、とご示唆をいただいたように思います。

また、小山奈緒会員(上伊那医療生協本部職員)から長野県民主医療連合会が行った「生活保護受給者の実態調査」の報告がありました。生活のしづらさを抱えた一人ひとりの生の声が、その数字の裏から聞こえてくるような発表でした。

アンケートの感想には「フードバンクや食料支援の考え方が勉強になった」、「専門職も地域住民として同じ目線で、との先生の言葉がとても響いた」等あり、多くの学びや気づきを得た学習会でした。

### 東信地区 第3回学習会

#### 「居場所」について語り合おう

1月18日(日)15:00~16:30 佐久平交流センター第3会議室に22名が参集。【ワールドカフェ方式】で対話を重ねました。4~5名のグループに分かれ、自己紹介+今年の抱負・目標を発表。テーマ「事業所での居場所と工夫を出し合う」・「居場所は何故必要?」…各自、付箋へ記入した後は“馬の折り紙”(トーキング・オブジェクト)を奪い合うように、意見が飛び交いました。“ホスト”を1名テーブルに残し、他のメンバーは“旅人”になり別グループへ移動。“ホスト”は自分のテーブルで出たアイデアを紹介し、つながりを探る。“旅人”は元のテーブルに戻って、旅で得たアイデアを紹介しながら対話。「社会福祉士としてクライアントの居場所を考え過ぎ、自分をおろそかにしている」「職場でも家庭でもない第三の居場所は、自身をリセットするためにも大切」などの意見を聞きながら「社会福祉士会も居場所の一つ?」と感じ入りました。その後69%の面々が新年会へ繰り出したようです。

8~12分で「チーン」と鳴らされ、休憩/移動



発言したい人が手に取る。持っていない人はしっかりと聴く。互いを尊重する為のツールとして活用。



他のグループはどんな話が出たのかな?

## 私たちの地域における 災害時の課題と必要な支援とは

氏名：神津直也

所属：小諸市社会福祉協議会

### <職種・業務内容>

地域福祉係に所属し、災害時における地域の支え合い活動を推進するため、支え合いマップ作りなどに関わっています。

### <私たちの地域において災害時に課題となること>

私が所属する小諸市は、比較的災害が少ない地域だと言われています。住民の中には「小諸は大きな災害がないから大丈夫」という意識を持っている方も少なくないと感じています。「きっと大丈夫だろう」が、いざ災害時には課題につながる恐れがあります。

### <その課題に対する解決方法や必要な支援>

県内に限らず全国でも毎年のように大きな災害が発生し、小諸市でも災害を我が事として捉えている方も増えているような実感です。小諸市社協では、前述した各地区でのマップ作り、サロン活動や市内団体等を対象に災害をテーマにした学習会等を行っています。

### <万が一の災害に対して備えていること、取り組んでいること>

社協は災害発生時、災害ボランティアセンターの開設が大きな役割となっています。スムーズに開設できるよう毎年訓練を行っています。訓練は職員だけではなく、市内外の団体や関係者と連携して実施しています。個人では、家族間で万が一災害が発生した際に避難する場所を決めています。

### <長野県社会福祉士会が行う災害支援の役割や使命、取り組みなどについて思うこと>

災害が発生すると個人だけではなく、地域レベルで「ふだんの・くらしの・しあわせ」が崩れてしまいます。被災地域にいる社会福祉士も被災する可能性がある中で、外部の力が必要不可欠です。社会福祉士会として多くの役割がある中で、地域支援のサポートが重要になってくると考えています。



小諸市社協前の桜並木です。春は桜、秋は紅葉が綺麗です。

氏名：徳永寛行

所属：社会福祉法人賛育会 豊野清風園

### <職種・業務内容>

特別養護老人ホームの生活相談員をしています。特養のご利用者・ご家族の相談や連絡、特養入所の調整などの業務をしています。

### <私たちの地域において災害時に課題となること>

私たちの事業所がある長野市豊野町は2019年の台風19号災害によって千曲川が氾濫し、浸水被害が発生しました。現在は堤防の強化など対策が進められていますが、近年の気候変動に伴う災害の激甚化・頻発化などにより浸水リスクがある地域ということを認識しています。

### <その課題に対する解決方法や必要な支援>

豪雨災害は気象情報などで、事前にある程度の予測が可能です。ハザードマップにより浸水リスクを想定しておくことや、近隣の施設等とあらかじめ避難協定を結んでおくなど、万が一に備えて準備しておくことが必要だと思います。また、災害が予測される場合には、人手が確保できる昼間のうちに避難の決断をすることも大切です。

### <万が一の災害に対して備えていること、取り組んでいること>

災害当時、ご利用者に関する記録は紙ベースで、1階事務所の浸水により多くが使用不可となってしまいました。現在はパソコンベースとなっており、また記録ソフトの導入によりクラウド上にデータがあるため、事業所が被災した際も別の場所からデータへのアクセスが可能となっています。紙の書類もありますが、優先度の高いものを選別してあり、非常時には持ち出すものが決まっています。

### <長野県社会福祉士会が行う災害支援の役割や使命、取り組みなどについて思うこと>

私たちの事業所が被災した時には、大切なのは地域の復興という考えのもと住民の皆さんの支援を行いました。復旧活動を一緒に行う中で話をしたり、困りごとを聞いた際には行政やボランティアコーディネーターにつなげたり、集まれる場所づくりをしたりと、さまざまなことに柔軟に対応していくことが求められるのかと思います。



事務所…浸水はデスクよりも高く、キャビネット上部まで達しました。1階にあった書類やパソコン類など全てが水に浸かってしまいました。

能登半島地震から2年が経ちました。被災地では日常に戻れず、復興と呼べるには程遠い状況です。自然災害はいつ、どこで起きてもおかしくありません。近年、各地域で個別避難計画の策定が進んでいます。しかし、実際の災害時にどこまで機能するかは未知数です。だからこそ、私たち社会福祉士は、災害への備えとして日ごろから地域の方々とのかかわりをどのように築いていくかを考えていく必要があるのではないのでしょうか。

氏名：奥原和彦

所属：社会福祉法人中信社会福祉協会  
事務局総務課、障害者相談支援センター中信

#### <職種・業務内容>

総務課長兼センター長

法人における総務全般の業務と相談支援専門員として相談支援を行っています。

#### <私たちの地域において災害時に課題となること>

松本圏域は盆地であることから、大規模災害が起きた場合、交通手段が遮断され、孤立してしまう恐れがあります。また、医療的ケア、行動障がいなどの重度障がい者やひとり暮らしの高齢者の方々に、日々必要とする福祉サービスを提供できなくなる可能性があります。

#### <その課題に対する解決方法や必要な支援>

日ごろから福祉関係者のみならず多くの支援者による地域ネットワークの構築と社会福祉事業者の業務継続計画の横断的な情報共有が必要だと考えます。現在、各地域で進んでいる個別避難計画を要援護者に対して進めることと、その計画の共有ができる地域づくりが必要です。

#### <万が一の災害に対して備えていること、取り組んでいること>

当法人においては、平成26年1月に「災害時における福祉避難所の設営に関する協定」を松本市と締結しました。今年度は、福祉避難所開設運営の研修を実施しました。当法人の障害者支援施設においては、災害倉庫を設置し、災害時の非常食や災害備蓄品の装備を行い、毎年、訓練を実施しています。

#### <長野県社会福祉士会が行う災害支援の役割や使命、取り組みなどについて思うこと>

長野県DWATが災害地派遣で活躍されていることがあまり周知されておらず、平時からDWATの必要性を長野県社会福祉協議会と連携して訴えていくことやより多くの災害派遣福祉チーム員の養成に力を入れていくべきだと思います。



当法人の障害者支援施設におけるBCP（業務継続計画）訓練の様子です。

氏名：細田真太郎

所属：喬木村地域包括支援センター

#### <職種・業務内容>

喬木村地域包括支援センターで主任介護支援専門員をしています。介護予防支援や高齢者に関する相談業務を行っています。

#### <私たちの地域において災害時に課題となること>

村内を通る主要な道路が土砂崩れで塞がると、集落が完全に孤立する可能性があります。電話も不通になると、安否確認ができなくなることも考えられます。高齢化が進み、自力で避難所へ向かうことが難しい高齢者が多く、避難には誰かの支援が必要になります。

#### <その課題に対する解決方法や必要な支援>

自力で避難することが難しい高齢者のために、誰がどのようにサポートするかの個別避難計画の作成が急務です。また、事業所のBCPや個別避難計画が作成されたまま内容が見直されていないため、実地的な訓練や、それを踏まえた内容の見直しを行う必要があります。

#### <万が一の災害に対して備えていること、取り組んでいること>

村内の事業所と連携して個別避難計画の作成を進めています。また、被災して紙の個別避難計画が確認できなくなる事態に備えて、オンラインの地図情報に個別避難計画の内容を落とし込むことを検討しており、その情報を確認する訓練も実施したいと思っています。

#### <長野県社会福祉士会が行う災害支援の役割や使命、取り組みなどについて思うこと>

災害発生時、事業所や職員も被災する中、福祉事業者が事業を継続することは困難です。災害発生時からその後の生活再建まで、被災者に寄り添う重要な役割を担うDWAT（災害派遣福祉チーム）への期待が一層高まっていると思います。



伊久間縄文の丘フルーツパークからの風景です。

## 「地域における老健施設の社会福祉士として」

木内 健介 (佐久総合病院老人保健施設)

支援相談員の業務内容は、通所・入所の利用相談、療養生活上の支援や受診調整、施設内外のサービス担当者会議への参加、退所支援、地域貢献活動など多岐にわたります。

日々の相談内容は複雑・多様化しており、居宅サービス事業所、医療機関、行政機関との連携が今まで以上に重要であると実感しています。また、施設の運営に関しては、慢性的な職員不足、稼働率の低下、施設コストの増大などにより、安定した収益確保が難しい状況が続いています。「目の前のタスクをこなす」ため、時間に追われ余裕のない毎日ですが、少しでも前向きにより良い支援、より良い介護老人保健施設（以下「老健」）を目指して取り組んでいます。

その際に拠り所になっているのは、「社会福祉士の倫理綱領」テキストです。利用者さんに対する支援においては、自身の振り返りや新たな気づきを得られ、組織・施設においてはその中でソーシャルワーカーとして求められる役割を再認識するために、折に触れて活用しています。

新年度に向けて、「地域における老健の役割」を意識して活動する事を目標としています。行事・イベントや施設見学会等により、地域住民の方々が気軽に老健へ訪れていただく事を考えています。また、コロナにより自粛していたボランティア活動が再開となり、利用者さんにとっては楽しい時間のひとつとなっています。施設の外へ目を向けて、地域とのつながりを意識し、そこから地域のニーズを感じ取っていきたいです。



\*次号は、佐久総合病院医療相談室 小林 有菜さんにバトンタッチします。

## 福祉士について「ぐるっと」考える

田中 俊之 (長野県社会福祉士会南信地区諏訪ブロック)

社会福祉士という資格職について「ぐるっと」考えてみたいと思う。

今、私は就労支援の仕事をしているから自分の職歴についてもよく考える。私は社会福祉士でない仕事の経験の方が長い。学校を卒業して初めに取った資格は精神保健福祉士だった。20代の私は心理学の勉強をしていたから精神科病院で働きたいと思っていた。十数年、精神科PSW（現MHSW）として働いた。20年来の福祉職で私の「核」になったのはこの仕事だ。開設して半世紀になる古い病院で退院（地域移行）支援と訪問看護指導を行った。MHSWは精神科病院で訪問看護指導の診療報酬を得ることができる。毎日看護師と2人で在宅の患者さんの家を回る。30分以上患者さんやその家族と話をし、30分は話をするのに短くない時間だ。自立支援医療が適用されるとしても1回数百円は患者さん本人からいただく（後日外来で清算する）。だから在宅生活に関してさまざまな「ネタ」を用意して話さなければならない（黙っていたら仕事にならない）。説得力のある健康、薬理、心理の「ネタ」をたくさん身につけた。いわば「治療文化の営業」職であった。そして病棟では年間何人退院させるか——地域移行に悩んだ。ベッド数の5%だったろうか、私が勤めていた病院では年間6人。6人に達しなければ「地域移行実施加算」は得られない。5人では加算ゼロだ。今年は6人になるか、自分たちMHSWの人件費にもなっているその加算を得るためにすべきこととしなくて良いことを廊下を歩きながら考えた。民間の病院の収支——経営感覚を知ることができた。

順序は逆になるが20代の頃は児童養護施設に勤めた（まだ社会福祉士ではなかった）。5年ほど働いたが今でも一緒に登山する元同僚とは「その倍くらい働いたよね」と話す。私の5年なら10年は働いたという実感だ。密度が高かった。児童指導員や保育士は子どもたちと（ほぼ）一緒に生活する。交代制勤務の施設だったが遅番と早番の間は家に帰るより施設に泊まってしまった方が早いから、布団を持ち込んで事務棟の職員控室に泊まる。昼間「格闘」し「甘えられ・甘やかせた」子どもたちのことを記録する。子どもたちは養護施設で「育ち直し」をする。親元で得られなかった子どもとしての経験を施設で取り戻そうとする。公設民営の施設で、3割の子どもは何らかの障がいを抱えていた。記録はまさに「参与観察」になる。子どもと関わった事実（客観）と思い感じた考察（主観）を書く（私は福祉の記録には客観だけでなく主観——参与して観察したことも書く必要があると考えている）。6畳はあったらどうか、「田中さんは遅番の夜あそこにいる」と勤の良い子どもに噂される狭い控室で、あーでもないこーでもないと考えて育成記録を書いた。その参与と観察が感情労働に摩擦させられない強さを私に与えてくれた。最近、圏域の自立支援協議会で福祉職25年、30年選手とよく話をし、荒波轟く福祉職の世界で生き残ってきた人たちと、互いの仕事や経験を尊重しつつ話をするのは愉快だ。今の私は自分の（所属する）法人から「金にならない仕事」をさせてもらっている。福祉職は若い人たちに人気がない、とは思っていない。子どもたちに関わることで、障がいを負う人たちに関わることでしか得られない何かを、給料という労働の対価を得つつ、見出していくことのできる稀有な職業であるから。

### 今後の予定

最新の予定は、本会ホームページ (<https://nacsw.jp>) をご覧ください。

日時(曜日)	事業名・研修名	会場	備考
3月8日(日)	第6回 理事会	オンライン	
6月13日(出)	福祉まるごと学会・定時総会	オンライン・集合のハイブリット	

◎ 入会状況 (2026年1月末現在) \* 会員数：1,258人 入会率：23.03% 人口10万人あたりの会員数：63.31人

### 編集後記

今回の特集では、改めて「私たちの地域」における災害時の課題。防災は特別なことではなく、日々の暮らしの延長線上にあります。「誰がどこで困っているか」を知っているという社会福祉士の強みを、地域の安心にどう活かしていくか。一步步、共に考え、備えていきましょう。

(M.M)